

A' 90mm

怪奇小説作家

「悪魔のトリル」講談社 1986年
 「ドールズ」中央公論社 1987年
 「星の塔」実業之日本社 1987年
 「蒼夜叉」講談社 1988年
 《直木賞受賞》
 「緋い記憶」文藝春秋 1991年
 「私の骨」角川書店 1992年
 「眠らない少女」角川書店 1992年
 「四谷怪談」講談社 1995年
 「前世の記憶」文藝春秋 1996年
 「鬼」角川春樹事務所 1996年
 「幻少女」角川書店 1997年
 「蒼い記憶」文藝春秋 2000年
 「幻日」小学館 2003年
 「非写真」新潮社 2014年 ほか

高橋は幼い頃から、目の前の現実とは異なる別の世界の存在を認識していた。小学校に入学して間もなく、仲良しの少年の死を予知夢で知ったのが最初だった。その後も親戚の寺で生霊を見たり、弟の親友の霊につきまとわれたりと、超自然的な現象にやたら出くわした。

母方の叔父に無類の怪談好きがいて、その影響も大きかった。東北大学でロシア文学を教えていた叔父の口癖は、「怪談こそが文学の原点」だった。高橋は怪談を通じて物語の面白さを教えられたのだ。

そんな高橋の書く怪奇小説が、断トツの怖さを誇っているのは当然である。高橋はホラーを創作としてではなく、本当に起こり得る話として書いているからだ。

お勧めは第百六回直木賞を受賞した名作『緋い記憶』。ちなみに直木賞で怪奇小説が受賞した例は皆無である。高橋ホラーが文学的にもハイクラスであることの証しと言えよう。

B' 92mm

歴史小説作家

「火城」PHP研究所 1992年
 「筋鬼九郎」実業之日本社 1992年
 「炎立つ」NHK出版 1992年(全5巻)
 「風の陣」PHP研究所 1995年(全5巻)
 「だましゑ歌麿」文藝春秋 1999年
 《吉川英治文学賞受賞》
 「火怨 北の輝星アテルイ」講談社 1999年(上下巻)
 「時宗」NHK出版 2000年(全4巻)
 「天を衝く」講談社 2001年(上下巻)
 「ジャーニー・ボーイ」朝日新聞社 2013年 ほか

執筆意欲の赴くままミステリー、SF、ホラーと書き続けて四十代を迎えた時、高橋は歴史小説に取り組もうと決意した。司馬遼太郎を尊敬する高橋にとって、それは必然だった。

西洋技術導入に力を注いだ佐賀人を主人公に据え、初めて挑んだ歴史小説『火城』は新たな出会いを引き寄せる。『火城』を読んだ佐賀出身のプロデューサーが、大河ドラマ原作執筆を依頼してきたのだ。原作となった『炎立つ』は前九年・後三年の役を経て、奥州平泉に黄金文化が開き、やがて滅亡するまでを描く壮大な物語。全五巻もの大作を書き終え、生まれ育った東北の歴史の奥深さに目覚めた高橋は、以後その掘り起こしをライフワークと定める。

平成十二年には古代東北最大の英雄を描いた『火怨』で第三十四回吉川英治文学賞、平成十四年にはNHK放送文化賞、平成二十五年には第二回歴史時代作家クラブ賞実績功労賞を受賞。今や歴史小説の大御所として、高橋は揺るぎない地位を確立したのである。

C' 92mm

写真家

「真景錦絵」川嶋印刷 2013年



真景錦絵より『古都の盛り』(愛知県内丸)

高橋の一番の趣味は写真である。いや、もはや趣味とは呼べないだろう。腕前はプロ級と誰もが認めているのだ。

高橋は意外とせっかちである。フィルムでは現像に時間がかかる。撮ったら早く見たいのである。フィルムからデジタルに移行して事情が変わった。撮ったらすぐ写り具合を確認でき、プリントも簡単に出来るようになったのである。これでカメラ熱に火がつく。新製品が発売されるたび買い求め、今までにカメラ五十台、レンズ二百本は集めただろうか。

ただ撮るだけでは詰まらないので、風景写真をパソコンで加工してみた。輪郭を強調し空の色を赤や紫で染め上げたのだ。浮世絵の手法の応用である。その結果生まれたのが、今回展示している『真景錦絵』。

もっとも最近『真景錦絵』をあまり作らない。画像処理しない素の写真で勝負している。特にポートレートが得意だ。レンズを通して見えてくる新たなリアルに、作家の高橋は惹かれてやまない。

D' 90mm

浮世絵研究家

「浮世絵鑑賞事典」日本出版センター 1977年
 「浮世絵ミステリーゾーン」講談社 1985年
 「新聞錦絵の世界」PHP研究所 1986年
 「その日ぐらし 江戸っ子人生のすすめ」PHP研究所 1991年
 「江戸のニューメディア 浮世絵 情報と広告と遊び」角川書店 1992年
 「謎の絵師 写楽の世界」講談社 1992年
 「浮世絵探検」岩波書店 1997年
 「高橋克彦の浮世絵ファンダーランド」平凡社 2000年
 「浮世絵博覧会」角川書店 2001年 ほか

高橋の父親は医者だったが、美術が好きで画廊も経営していた。高校生の高橋は画廊に入り浸り、画集や美術雑誌を眺めるのが日課であった。

ある日、巨大な骸骨を描いた国芳の浮世絵を見て、大きな衝撃を受ける。骸骨が医学的に正確なものも驚きだったし、表現がダイナミックで斬新なことには、もっと驚かされた。古臭いと思いついでいた浮世絵に対する認識がガラリと変わった。

大学では独学で浮世絵研究に打ち込んだ。卒業後、就職せず丸一年かけて執筆した『浮世絵鑑賞事典』が、高橋の初めての著作となる。

初心者向けに分かりやすく書いたが、内容は極めて高度。現時点でも本書の完成度に匹敵する事典は見当たらない。

それから高橋は短大講師を経て、浮世絵の知識を生かし作家デビューを果たす。もしも研究者の道を歩んでいたなら、日本有数の浮世絵学者となっていたに違いない。